



鈴木中医長

「見た腎臓がん患者にとって光が見える進歩」と話す。鈴木医師によると、腎臓がんは40〜70代で発症することが多く、早期発見には健康診断で受ける腹部エコーやCT（コンピュータ断層撮影）

医療最前線 がん治療の今

県立中央病院から

〈234〉

近年の薬物療法の進展で、手術が困難な腎臓がん患者の生存率向上が期待されている。山梨県立中央病院も積極的に新薬を導入し、治療成績が上向いている。同院泌尿器科医長の鈴木中医師は「進行

などが鍵となる。部分切除や全摘出などにより、ステージ1〜3までの患者の5年生存率は他のがんと同色ない実績となっているという。

一方、他の臓器への転移などがあり手術が難しいステージ4になると、5年生存率は大きく低下する。国立がん研究センターの最新データによると、ステージ3は67・3%、ステージ4は15・3%。県立中央病院の2006年以降の集計でもステージ4は11・9

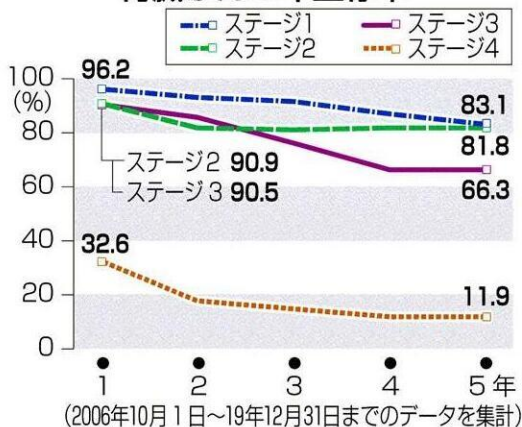
%となっている。鈴木医師は「他のがん比べて手術以外の有効な治療法が乏しかったことが要因」と解説する。鈴木医師がこうした状況の打開に向けた節目の一つと振り返るのは2008年。腎臓

囲が拡大し、分子標的薬と組み合わせ新たな薬物療法も登場するなど目覚ましい進展を遂げている。分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤ともに今も種類は増えている。同院はガイドラインを基にがんの進行度や患者の健康状態を見極めて治療薬の選択を進めている。鈴木医師は「治療効果は現場でも実感できている。ステージ4の生存率は今後、向上していくだろう」と強調する。

腎臓がん薬物療法が進展

ステージ4完治も視野

山梨県立中央病院
腎臓がん5年生存率



がんに対応した分子標的薬が保険適用となったことだ。完治に結びつくまでは言えないものの、がんを成長させるシグナルを止める効果があり、がんを小さくする効果が従来よりも向上したという。2016年には免疫ががん細胞を攻撃する力を維持する「免疫チェックポイント阻害剤」が腎臓がんの分野にも進出。ステージ4であっても完治が期待できる可能性が高まった。その後、保険適用の範囲が拡大し、分子標的薬と組み合わせ新たな薬物療法も登場するなど目覚ましい進展を遂げている。分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤ともに今も種類は増えている。同院はガイドラインを基にがんの進行度や患者の健康状態を見極めて治療薬の選択を進めている。鈴木医師は「治療効果は現場でも実感できている。ステージ4の生存率は今後、向上していくだろう」と強調する。選択の幅が増える中で、鈴木医師の視線の先にあるのは、患者のがんの遺伝子変異に基づいて最適な治療薬を選択するゲノム医療との融合だ。「がんの遺伝子解析が進み、効果が期待できる薬を選択する方法が確立されれば、がんに対抗する大きな武器になる」